

男はつらいよ
寅さん (日・2019)

男はつらいよ
お帰り寅さん



私は「男はつらいよ」シリーズ全四九作のほとんどもを観ている。ただし、すべてビデオ鑑賞であり、映画館で観たことはなかった。

ところで、新潟の実家で一人暮らしを二〇年以上続けて八五歳になった母親を、昨年一月に相模原の高齢者施設に入所させた。年越しには自宅に招いた。母親も寅さん映画が好きなので、二二年ぶりの第五〇作となる本作品を元日に二

CR)に勤務している。その仕事で日本に出張し、たまたま立ち寄ったその書店で満男のサイン会に行くわしたのだ。

サイン会終了後、二人は神田神保町で寅さんの恋人だったリリー(浅丘ルリ子)が経営するジャズ喫茶へ。そこで思い出話に花を咲かせる。泉は現地で結婚して二児の母となっていた。満男は妻の死には触れない。その後、いまでは「カフェ

くるまや」となった寅さんの実家に行く。そこには寅さんの妹・さくら(倍賞千恵子)とその夫・博(前田吟)が住んでいる。高齢者住宅らしく土間から居間に上がるための手すりがあり、居間の畳の上にはテーブルと椅子が置かれている。

翌日、泉は三浦半島にある介護老人保健施設にいる父親(橋爪功)に会いに満男の車で出かける。離婚した母親(夏木マリ)が先に着いていた。元夫にけんもほろろにあしらわれて、帰りの車内で母親は泉と大げんかする。満男は必死で仲裁する。

人で観に出かけた。銀幕での初寅さんである。寅さん(渥美清)の甥の満男(吉岡秀隆)は小説家になっている。高校生の娘もいる。ただし妻は六年前に病没していた。満男の最新作が高い評価を受けたため、都内の大型書店でサイン会が開かれた。そこに、満男の高校時代の恋人・泉(後藤久美子)が現れる。彼女はヨーロッパ在住で国連難民高等弁務官事務所(UNH

あいつの後、満男は搭乗へと向かう泉を呼び止める。そして妻の他界を打ち明ける。なぜもっと早く言ってくれなかったのかと尋ねる泉に、「君に負担をかけるといけないと思って」

と答える満男。「満男さんのそういうところが好き」と泉はたまらず満男にキスをする。満男のわずか三日の淡い恋はこうして終わる。

随所にシリーズの名場面が回想シーンとして挿入されている。満男の運動会に博の代わりに行くことを頼まれはりきる寅さんに、満男がそれをいやがって周囲も察知する。「お兄ちゃん、わかってよ」とさくらに言われてふてくされる寅さん。自分あてに届いたメロンを、自分を勘定に入れて切られてしまい、激怒する寅さん。第四二作で名古屋に向かう泉を東京駅で満男が見送るシーンがある。ドアが閉まる寸前に満男が飛び乗る。この原型は第一作で柴又駅に博を追いかけていったさくらが、博の乗った京成電車に飛び乗るシーンにあったと気づいた。

ラストにはシリーズを彩ったマドンナたちが次々に登場する。京マチ子(第一八作)だけは「寅さん、人はなぜ死ぬんでしょう」と台詞付きだった。超高齢社会のいまの日本が裏テーマなのだ。まさに私にも身近な内容だった。エンドマークが出ると、劇場内から拍手が起こった。ゴクミがもうちょっとうまければなあ。「それを言っちゃあ、おしまいよ」か。

(二〇二〇年一月一日・T.O.H.O.シネマズ府中)
(にしかわ・しんいち/明治大学教授)